

歌舞伎に

— 女方への道 — 生きる

教育映画祭優秀作品賞
文部省選定



16ミリ・カラー/45分 240,000円



企画・監修 国立劇場
製作 桜映画社

指導 中村 又五郎
化粧指導 尾上 菊蔵

〈協力〉

尾上 梅 幸 中村 雀右衛門
中村 又 蔵 鶴澤 政一郎
竹本 清太夫 山本 長之助
第六期歌舞伎俳優研修生

■解説

国立劇場では、歌舞伎俳優研修生を一般から募集し、二年の研修期間で後継者の育成を計っている。この映画は、五十七年三月に卒業した第六期生の卒業公演「寺子屋」の稽古を中心に、女方の演技修得の基本を捉えるとともに、一般にはなかなか見ることのできない、芸の伝承の姿を記録したフィルムである。

男が女を演ずるということから、女方では特に形が細部にわたって工夫されているが、その形をいかすものは、結局役への深い理解であり、それを、写真でなく、もう一度身体で様式的に表現することに力点が置かれている。指導にあたった中村又五郎先生のけいこは、近代的な演技指導で有名で、歌舞伎一般の演技の構造まで理解させ、歌舞伎への手引きとしても興味深いものがある。

入校したときは、ゆかたの着方も知らなかったような若者たちに「歌舞伎に生きる」決意をさせたものは何か――。

映画は、「女方の基本」を通じ、歌舞伎の演技の構造を理解させるとともに、伝統芸能伝承のきびしさと、そこに流れる師弟の情愛のやさしさを捉えることに成功したと信じている。

■すいせんの言葉

早稲田大学教授 郡 司 正 勝

女方は、かぶきの華とされる。かぶきの大きな魅力の一つに女方がある。女方は古くは西欧にもあり、今日では、インドや中国の演劇にも存するが、芸術として完成を遂げたのは、かぶきの女方であろうと思われる。すでに十七世紀の末には、世界に比類のない女方芸術論が、元禄期の芳澤あやめによって成立している。

女方は、男役の立役と区別されて、野郎かぶきの時代に出発をみるが、さらに若女方、花車方、老母役、姫、娘方などと分化してゆく。その演技は、男性が扮するものであるから、より様式化され、舞踊化されているのが特色だといえる。しかもリアリティを失ってはならない。難しさはそこにある。

この映画は、女方の基本訓練を追求したものである。むかしなら見せてはならぬ秘事に属していよう。舞台上で幻華を開く女方の実に真剣に取り組んでみせた、まことに珍重すべき映像である。

■内容

女方のけいこは、女の身体を作ることからはじまる。肩甲骨を両側から合わせて撫で肩を作り、ひざ頭をつけて脚を内またにする。胸と腰をおとし、衿をぬくと、化粧もしていない男の姿が、不思議と女にみえてくる。肉体を、このように不自然に形造りながら動かなくてはならない所に、女方の苦しさがある。けいこが終わると、身体中が痛くなるという。

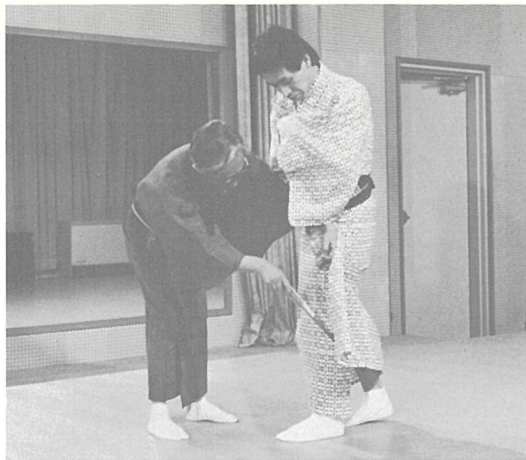
女の年齢や身分・職業などに応じて細かく形が工夫されているのも、女方の特長といえる。指導の中村又五郎先生が示すそのお手本をみていると、歴代の女方の、女に対する観察の鋭さと表現の巧みに驚かされる。それは更に、女の感情の動きを表わす細やかな形へと進む。恥じらう、すねる、怒る……。こうした形を身につけながら、演技へと発展してゆくが、その過程を「寺子屋」のけいこを通じて具体的にみてゆく。

形がいくら細かくきめられていても、心の動きが理解されなければ、形をいかすことはできない。けいこの初期の段階では、「おなかの中はどうなんだ!」という問いかけがくり返される。そして、内面の理解が進んでゆくと、今度は、その心を「写真でなく、身体で様式的に表現する」ことが要求される。

時にはきびしく、時にはやさしく、又五郎先生の、根気のいる、熱っぽい授業がつづけられてゆく。けいこの期間中には大先輩の「寺子屋」の舞台を見学、主役の二人（尾上梅幸、中村雀右衛門）のアドバイスをきく機会もあった。

そして、卒業公演の当日がやって来た。教えられたことを懸命につとめる研修生たちの一回限りの舞台は、国立小劇場を立錫の余地なく埋めた観客の拍手を、幾度もよびおこしたのである。

幕がおりてから、研修生たちは云った。「きびしいけいこでしたけど、生徒だという甘えがあったかもしれませんが。これからは、自分できりひらかなければならないきびしさがあると思います。」「自分の才能、努力で、どこまでやれるのか、こわいけど、やり甲斐があります。』



「寺子屋」の解説

藤原時平の陰謀で太宰府に左遷された菅原道真（菅丞相）の事件に取材した「菅原伝授手習鑑」の四段目が、「寺子屋」的一幕であり、義太夫狂言の代表作として、現代でもしばしば上演されている。

寺子屋で生計をたてながら、道真の子、菅秀才をかくまっている武部源藏夫婦のもとへ、それをかぎつけた時平の側から、秀才の首を渡せといってくる。思いあぐねた夫婦は、その日、千代という女性が弟子にと連れて来た小太郎の首を打って身代りに差し出すと、検分役の松王丸は、秀才の首と認めて帰ってゆく。ホッとした源藏夫婦のもとへ千代が息子をひきとりにくるが、母親も斬ってその場をのがれようとする源藏との立廻りののち、千代は、息子を身代りにすることを承知で寺入りさせたのだという。しかも父親は、検分役の松王丸だったのである。

全篇を通じ、裏の裏のある心理描写の連続で、緊張感がみなぎる一方、忠という大義と子を思う人間的な心情との板ばさみで苦しむ悲痛な嘆きの場面が展開される。

■スタッフ

製作	村山英治	照明	水村富雄
	利光久輝	編集	吉田栄子
脚本	藤原智子	解説	川上裕之
演出		現像	ソニー・PCL
撮影	植松永吉	録音	東京テレビセンター

製作

株式
会社

桜映画社

東京都新宿区西新宿1-22-1
スタンダードビル TEL.(342)5768

配給